

さて、最も重要なことは、現実の運動、その展開過程である。

我々は常に闘争の戦略的拡大を図らねばならない。69年あの闘争の初期に我々は占有空間の拡大を追求していた。大学建築空間から地域への外延的拡大を指向したのである。しかしその展望を出せず安保へと純化することによってそれを切り捨てた。我々は実存が占める空間を意識性によって創出し、つまり非日常といわれる反秩序を日常体制秩序の中に創り出しその二重性の持つ矛盾から生じるエネルギーを反秩序に向けることは既にやった。しかしその方法論の解明・措定は未だなしていない。であるが故に我々の云う地域地区というのは空文句でできりありえず、主体の側からはんで相手にもされない。結果として此方が勝手に押しかけていくだけということになる。大家はつねに自らの生活圏を守ろうとする。破壊が誰から起きたものであろうと、それは往々にして権力からの破壊に対しては弱々しく反権力の側からのそれに対しては強力でである。それらの破壊に対して全て反対闘争が起る訳ではないし、まして反権力闘争まで至るのは例外といってもいい。水俣病、ヘドロ等の〈公害〉闘争は明らかに反企業の闘争を展開してはいる。しかしそれは〈革命〉を指向しているのではない。田子浦水軍の小父さんは、社会主義は嫌いだとばかり云っている。一方、60年代後半の闘争が突出していたが故にそれに触発され戦後崩壊してきたといわれる住民の地域意識が〈自衛団〉なる形態をとって現れてきた。しかもそれは政府警察の肝煎があったとはいえ反、反秩序の共同主観を形成し、権力は自らの下に恰も〈隣組〉の如く統括せんとしている。更に京都のある金属工場の労組はその闘争を地域住民をまき込んだ闘争へと発展させている。沈黙しつづけた日本の大衆は1970年代、権力にイチャモンをつけたのか。賢しい権力が逆にこの大衆の内包する膨大なエネルギーを自らの手中に入れようと企てないことはない。72年沖縄返還の後北方領土、朝鮮半島は既に日程にのぼっている。70年安保を圧倒的に乗り切った権力にまさに好機である。我々はその全共闘の闘いをまるで啓蒙運動であったかのように終らせてしまう訳にはいかない。当初の問題意識を追求し新たな自己実現の方向性を地域闘争の組織化、地区ソヴィエトへの道程と認めての展望として出すべきであったのだがそれは今でも遅くはないしむしろより大きく問われているといえる。これは我々の運動が思想的営為になりえず単なる概念的作業であり相変わらず「マニロフ」たちを大量に生み出してしまふことへの自己批判でもある。更には、全共闘運動の組織論的再検討までも狙って、我々とは全く違う位相からそれこそ自然発生的に展開されてきた地域住民運動へコミットすることにより〈私一箇一共同性〉または〈共同主観生成過程〉のストラクチャー解明への材料とし、70年代、この恐るべき時代を生きて生きなければならぬ。

- | | | |
|-----|--------------|---|
| その1 | 人類学的思考 | <ul style="list-style-type: none"> ■山口 昌男 (大学助教授) ■10月31日 PM 1:00~3:00 |
| その2 | 神話・共同幻想・物象化 | <ul style="list-style-type: none"> ■中村雄二郎 (大学教授) 広松 渉 (政治研究員) 長谷川 宏 (大学講師) ■10月31日 PM 3:30~5:30 |
| その3 | 幻点もしくは 浮名の黒幕 | <ul style="list-style-type: none"> ■青 孝行 (演劇自立派) 内田 栄一 (マスコミ ゴキブリ派) 佐藤 信 (センター '70) ■11月1日 PM 1:00~3:00 |
| その4 | 演歌はブルースか | <ul style="list-style-type: none"> ■松永 伍一 (土塊派詩人) 相倉 久人 (ジャズ革命家) 沢ノ井竜二 (藤圭子マネージャー) ■11月2日 PM 1:00~3:00 |
| その5 | 地域・公害 | <ul style="list-style-type: none"> ■界闘争委員会 全金属京滋地本ゼネラル労組 三里塚芝山空港建設反対期成同盟 ■11月3日 PM 1:00~4:00 |
| その6 | 芸術は解体するか | <ul style="list-style-type: none"> ■津村 喬 (差別構造研究所) 文学部ゼミナール協議会 ■11月3日 PM 3:30~5:30 |